Here Now Bestopia
ベストピア Bestopia
第463号
2025年9月号
bestopia.jp
パリ通信
第165号

アドバイスに助けられてラッキー

市街に引っ越して1年になります。便利さを十分に満喫して快適な老後を過ごさせて頂いており、感謝の日々です。
特に今年の猛暑には心身とも対応するのが難しく、体調を上手にマネジメントできていませんが、80代も半ばになればこんな状態が普通なのだろうと現状を受容して、気分がポジティブになった時には間髪を入れずに、設定した目標に突進するという繰り返しの日々です。

人との約束を果たすのも苦痛を感じることが多くなってきました。何もしたくないという誘惑はいつもあります。このような時は、まず、祈ります。そして、使命感を呼び起こさせて頂いて、精神の目覚めを促し、力が与えれ、課題に取り組んでいます。その結果疲れがドゥっと出ます。数日間は肉体が思うように動かないので、ひたすらじっとして回復を待ちます。ここで、幸いなことは、まだ、「回復能力が与えられている」とうことです。何もできない期間が長くはなっても、まだ、待てばよいのだとの希望を持って休むことができる。最近は回復期間が長くなっているので、無理を避けるように心がけているところです。そんな状況の中で、この夏、日々感謝いていることがあります。

1年前の引っ越してきた時、リビングルームにエアコンを一台設置してもらいました。
長い間エアコンなしの生活を森の中でしていましたので、エアコンはなければいいものという消極的な考えを持っていました。従って20坪のマンションには一台で十分だと決めつけていたのです。親切な業者さんで、一台取り付けが終わった時に、このマンションは日当たりが良くていいですが、「夏は暑いですよ」と言われました。昨年は9月の終わりでも確かに暑かった。でも、玄関のドアーを開けておくと風が通りよく抜けるので、一台で風を回せば寝室にも涼しい風は入ってくると言いますと、業者さんは「そうですか」と言って帰り支度をしながら、このマンションは「夏暑いですよ」と繰り返す。

話をよく聞いてみると「そうかなぁ」と思い、そこまで仰ってくださるのならと「じぁ、各室に付けてください」と二つの寝室に追加で依頼をしました。冬から春まではエアコンは一台で十分であっので、二台付け加えたことを若干、後悔の念があった。ところが、この異常な猛暑が襲ってきた。寝室は多湿高温になり、とても過ごせる状況ではなく、エアコンの有り難さが身にしみてきた。
しかし、私はエアコンを付けたまま眠ることができないという習性があった。30年以上に渡って月に5日から6日ホテルに泊まる生活の中で、夏のエアコンでは毎年体調を崩していた。エアコンにはある種の恐れと抵抗感を持っていました。

ホテルには空調のきつすぎるところ、布団が常に冬用の厚手であったり、逆に毛布一枚であったり、窓が開閉できないところもあり等々で所与の環境が異なり、エアコンの使い方も一定せず、結局はエアコンは切って寝る。それに合う夏がけを持参することにして、窓の開閉できるホテルに限定して泊まるという工夫をしてきました。今はホテルに泊まることが苦痛になって二泊を限度に予定を組んでいるところです。それでも週末は寝込んで回復に時間がかかります。

ところが、この夏の暑さでどのようにエアコンと仲良くするかという課題に向き合うことになりました。業者さんと妻の熱心な研究の結果、エアコンの温度を28度に設定して（途中で切らない）安定した環境でパジャマと夏掛けの選択を最適にすることにしました。
このアドバイスに耳を傾けるのに時間がかかり、悪戦苦闘の結果、やっぱり「仰る通り」と脱帽して、従うことになりました。すると、快適！快適！の連続で、感謝、感謝の日々になったというわけです。経験豊富なベテラン、専門家の意見には素直に早期に従った方が快適から感謝の光の道が開けてくる。その実証をした猛暑の日々です。
この業者さんにも「暑いほど、感謝深まる、熱い夏」と御礼を申し上げ、喜んで頂けました。こうして人間関係も楽しいものになる、幸せな日々が与えられます。

さようならアンパンマン

朝ドラ「あんぱん」に秘められた思いとは

視聴率の高い「あんぱん」がまもなく終わります。
15分の短い時間に毎回感動を与え続けてくれた番組です。
その魅力の背景は何かと考えまた。

一つは、（昭和の初め）戦前から戦中、更に戦後と激しく移りゆく日本社会を懸命に生きてきた人々の登場したこと。戦争の被害が民衆にどんな形で心の傷かとを残すかを核として、時代の移り変わりの中で 「僕らは無力」だと自覚しながら、平和を求め、正義を行うことは、自分も傷つくことを覚悟しなければならない、 そのことを知って生きていく悲哀の中にも、人間の温かさを伝えている。AIの普及で失われつつあるフェイス・トゥ・フェイスの人間関係の大切さを感じ取ることができたドラマであると私は思った。

もう一つは神秘に満ちた導入の映像と理解の難しい早口の音楽であったと思う。
物語の進行にはアンバランスに見え、聞こえる芸術が、見る人に「何かを考えさせた」のだろうと思う。それも毎日、毎日、アンバランス、昭和を一度に表現しているのだろうか私はついにあの音楽の速さについていけなかった。「賜物」の全文を調べ紹介しても尚、私には理解できなかった。

そんな私に助っ人が現れ、「賜物」全文に一つの意味をつけてくださった人がいる。

その方の全文をここに紹介します。
この紹介文を読まれた我が師は「この人は詩人ですか。この人にお会いしたい」と言われました。この方は感性論哲学の唯一の後継者と私は思っています。（ヒントはこれで十分だと思います。ベストピアでは個人名は控えています。）

では、全文をお楽しみください。

あんぱん「賜物・歌詞全文」

①　涙に用なんてないっていうのにやたらと縁がある人生
かさばっていく過去と 視界ゼロの未来 狭間で揺られ立ち眩んでいるけど
「産まれた意味」 書き記された 手紙を僕ら破いて
この世界の扉 開けてきたんだ 生まれながらに反逆の旅人

楽しい人生を生きたいと思っているのに、なぜだか涙に縁がある人生
過去は積み重なり、未来は全く予想もつかない、
過去と未来の境界で、さてどうしようとゆらぎながら目がくらむみたいだ
人は生まれる前に「産まれる目的」を決めてきているというけれど、
でも、私たちは生まれる直前にその目的をすべて忘れること選んでこの世に誕生するんだ
だって、目的がわかって生き始めるなんて、推理小説の種明かしを先に知って読むようなもんで
人生のおもしろさが半減しちゃうだろ？
目的通りに正しく生きるなんて優等生的にはいきたくないんでね、
全てをゼロにして忘れて生きる道を選ぶんだ、生まれながらの反逆者なんだ

② 人生訓と経験談と占星術または統計学による 教則その他、 参考文献 溢れ返る
この人間社会で
道理も通る伜間もないような日々だが 今日も超絶G難度人生を 生きていこう いざ

えらい人たちの人生訓・経験談とか、あと占い師が教えてくれることとか、
統計学から割り出した進むべき道とか、なんか生きる上の教則本みたいなものとかばかり
巷にあふれていて、もう辟易するような人間社会
この社会は道理が通るわけでもなくて、道理なんか守っていても横からすごい圧力がかかって
押しつぶされそうになるんだけど、それでも、今日も体操選手が離れ業を決めるように
この道理のないよな複雑怪奇な社会を曲芸師みたく
ギリギリのところで離れ業を決める曲芸師のように瞬発力と賭け、楽しく生きていこうぜ　いざ

③ いつか来たる命の終わりへと近づいてくはずの明日が
輝いてさえ見えるこの摩訶不思議で 愛しき魔法の伴を
君が握っててなぜにどうして? 馬鹿げてるとか 思ったりもするけど
君に託した 神様とやらの采配 万歳

われわれは、やってきたもとの場所、命の終わりへと帰っていく、そんな死に近づいていく明日のことが、なんかキラキラ輝いて見えたりする不思議な、でもいとおしい魔法のような人生の
その大事な運命のたずなを君が握っていて、なんで？自分の人生なのになんで君が？とか
でも、ぼくの人生の大事な鍵を君というパートナーに預けた天とか神様とやらの采配はやはりす

ごいよ、あなたでよかった、万歳！

④ この風に乗っかってどこへ行く 生まれたての今日が僕を呼ぶ
「間違いなんかない」 って誰かが言う 「そりゃそうだよな」 とか 「ないわけない」とか堂々巡れば 悲しいことが悔しいことがこの先にも待っていること知っているけど
それでも君と生きる明日を選ぶよ まっさらな朝に 「おはよう」

この世界に吹いている風に乗って、さあどこに行くんだろう、生まれたてのピカピカの今日という日がぼくを呼ぶんだ
人生には「間違いなんかない」とある人が言っていたっけ。「そりゃそうだよな」と思ったり、「そんなわけない、どうみてもこの道は間違ったよね」とか思ったり、ぐるぐると堂々巡り
この先の人生にも悲しいこと、悔しいことが待っているって知っているけど
それでも君と生きる人生をぼくは選ぶよ！一緒に行こう。まっさらな朝に「おはよう」とあいさつして一日を始めよう。

⑤ 感情線と運命線と恋愛線たちが対角線で 交錯して弾け飛び火花散り 燃え上がるその炎を燃料に 一か八かよりも確かなものは何かなんて言ってる場合なんか じゃないじゃんか
いざ どんな運命でさえも二度見してゆく 美しき僕たちの無様
絶望でさえ追いつけない 速さで走る君と二人ならば 「できないことなど 何があるだろう?」
返事はないらしい なら何を躊躇う 正しさなんかにできはしないこと ,この心は知っているんだ

手相の占い師がいう感情線とか運命線とか恋愛線とかそんな人生の大事なことが凝縮した手のひらみたいにぼくの人生の怒りや喜びの感情だったり、こんなことある？という運命的なことだったり、悩んで苦しんでどうしようもない恋愛のことだったりが交錯して火花散らして僕の中でエネルギーが燃え上がる、それを燃料にして一か八か、かけるしかない！
確かなものは何だろうなんて、悠長に考えている場合じゃない！
いざ、運命の女神たちが「ギョギョッ」とびっくりして二度見してしまうくらいの、あちこちぶつかって傷だらけのぶざまな僕たちの人生こそ美しい
絶望している暇なんてない、絶望なんか追いつけないくらいのスピードでとにかく今を夢中で走る君と一緒なら
「できないことなんて何かあるだろうか？なんだってできるんだ」
「この道が正しい道ですか？」と神様や天に聞いても、その答えはないらしい、なら、何をためらうの？
正しい道を歩くこと、なんかにはできない、おもしろい冒険にあふれた道があるって、心は知っている

⑥ There's no time to surrender(降伏する） 時が来ればお返しする命
この借り物を我が物顔で僕ら 愛でてみたり
諦めてみだりに思い出無造作に 詰め込んだり 逃げ込んだり
唯一で無二の詰め合わせにして返すとしよう

No　Time　限られた人生の時間が終わったら、もうやんちゃはやれない、ぼくの命はお返しする時、だからこそ、この一時期借りているこの命を、ぼくたちは愛したり、
あきらめて思い出たちを箱に詰め込んでその思い出の中に逃げ込んでしまったりしてる

最期の最期には、唯一無二の素晴らしい思い出の詰まった人生をこの箱に詰め合わせにして、神様にお返しするとしよう　（正解のない人生だったからこんなに無茶をやれて唯一無二の人生になった）

⑦ せっかくだから あわよくばもう 命を生きよう
「いらない、あげる」なんて 呆れて 笑われるくらいの命を生きよう 君と生きよう。

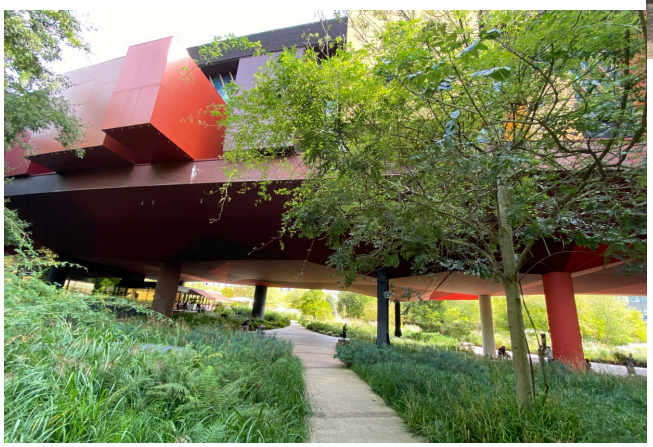
せっかくだから、こうして仮にもらえた人生という時間、この命を生きよう
最期に贈った箱詰めの人生を、神様から「いらない、あげる」なんて呆れて笑われるくらいのめちゃくちゃおもしろくて破天荒ででもいとおしい命を生きよう、君と一緒に生きよう。
（解説者　　月野直美）

パリ通信　第165号

パリ・ケブランリー美術館で「岡本太郎展」

9月の新学期が始まり小学校には元気な児童の姿が戻ってきた。
8月のパリは猛暑日もあったが日本の比ではなく、8月末からは雨が降り秋の気温が続いた。9月第一日曜日の7日は久しぶりに30℃近い太陽が出て絶好の散歩日和となった。
フランスの多くの美術館では各月の第一日曜日が無料となる。美術館、博物館、歴史的建造物の入場料金は上がる一方でEU圏外の学生、観光客には割引料金はなく20€(3500円)を超える。第一日曜日無料は有難い。

「ケブランリー美術館」はジャック・シラク大統領下、建築家ジャン・ヌヴェル設計により2006年アジア、アフリカ、オセアニア・コレクションを収蔵する美術館として開館した。開館時に植えられた桜の木、ススキ、草花はいまでは大きく影を落とすまでに成長し緑の散歩道に成長している。

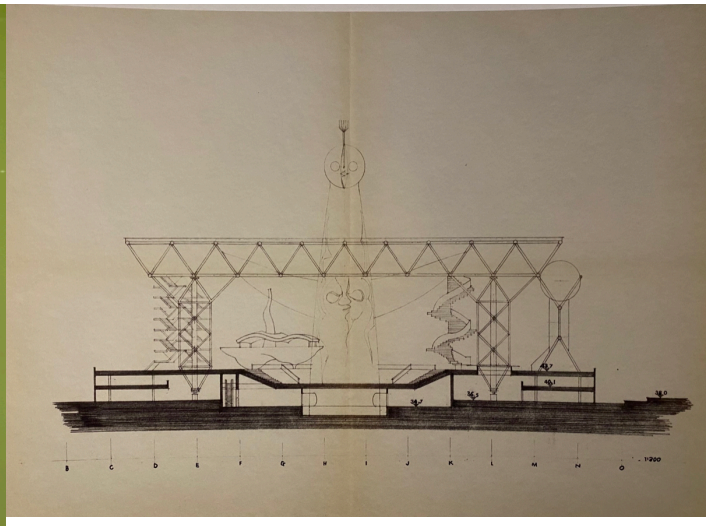


ここで「岡本太郎展」(2025／4/15～9/7)が開催された。1970年(昭和45年)「EXPO’70 大阪万国博覧会～ 人類の進歩と調和」のテーマ館「太陽の塔」をデザイン・設計した岡本太郎回顧展である。

展覧会を企画したブノワ・ビュケ(Benoit Buquet) 氏は1970年大阪万博について研究し、フランスではほとんど知られていない岡本太郎の功績を讃えたいと会場に頻繁に通い自ら解説されていた。私たち日本人にとって、とりわけ1970年大阪万博を知る世代にとって、岡本太郎は身近な存在だった。
1911年漫画家岡本一平と歌人岡本かの子の間に生まれた太郎は、両親に連れられて1930年から1940年までの10年間パリに暮らす。シュールレアリスム、アヴァンギャルドの芸術家たちが活躍していた当時のパリは10代の岡本太郎の将来を育てた。1939年ヨーロッパで第二次世界対戦が始まり、1940年マルセイユから日本へ向けて出航する最終の船で帰国したのである。帰国後参戦し、満州で捕虜となるも生還するが、パリ時代の作品は戦火で焼失してしまった。

77ヶ国が参加し、来場者6000万人を超えた「EXPO’70」で圧倒的なインパクトを与えた「太陽の塔」、ブノワ・ビュケ氏は現在のフランスにおける絶大なる日本ブーム、つまり漫画、アニメ、特撮映画、キャラクター人気に貢献したのが前衛芸術家岡本太郎だと言う。1956年公開の映画「宇宙人東京に現わる」(配給:大映)(監督:島耕二)(特撮:的場徹)は日本初のカラーSF特撮で、登場する「パイラ人」(一つ目の赤い星形の宇宙人)のキャラクターデザインを担当したのが岡本太郎である。的場徹はその後「ウルトラシリーズ」を手掛け、円谷プロダクションの創始者で特撮監督として怪獣映画(東宝から「ゴジラ」)を撮った円谷英二と共に日本の特撮を牽引する存在となる。

高さ70mの「太陽の塔」は足場のような金属の構造体の中央に置かれ、塔の内部には「生命の樹」があった。常に新しい芸術を目指し、破天荒とも言える岡本太郎のインパクトが傑出した「太陽の塔」は今も力強さを失っていない。あまりにも有名になった「芸術は爆発だ」の宣伝のように内から湧き上がるエネルギーを有していた。ピアノに向かい激しい色が炸裂するマクセル(Maxell) ビデオカセットのCM(1981年放映)は岡本太郎がパリで培った姿勢をよく表している。NHKは「TAROMAN 岡本太郎式特撮活劇」(全10話)を2022年7月教育テレビで放映し、「TAROMAN」グッズはマニアの大人気で人々魅了する力がある。当時の斬新さは今なお古びていない。



55年経った「EXPO 2025」(4/13から10/13までの184日間開催)。「いのち輝く未来社会のデザイン」がテーマ。8/30時点で1900万人の来場者数との発表だが、70年大阪万博時の熱狂、未来への期待は感じられないように思う。見ていないので批評はできないがパリにいて聞こえてくるのは「フランスパビリオンは人気だ」「イタリアパビリオンにはカラヴァッジョが来ている」「海外から入場券購入サイトにはアクセスできない」「マレーシアパビリオンは隈研吾の設計だ」など、断片的な話題性のみで2025年にあえて万国博覧会を開催することの意味、意義は見えてこない。

万博会場に足を運んでみれば印象も変わるのかも知れない。（古賀順子記）